

明治期に出版された日本語歌詞のカンタータ
—スカダーの「クリスマスのよろこびのおとづれ」—
Religious Cantatas with Japanese Text Published in Meiji Period
--Frank S. Scudder "GLAD TIDINGS FOR CHRISTMAS"--

椿（野口）紅子

Beniko (Noguchi) Tsubaki

This paper aims to clarify the background of the religious pieces with Japanese text compiled and published in Meiji Period Japan by an American missionary, Frank Seymour Scudder. He was sent by the Reformed Church in America (RCA) to Japan in 1897. The record in the archive in Hawaii states Scudder made three such cantatas, but currently only one, “GLAD TIDINGS FOR CHRISTMAS (*Kurisumasu no Yorokobi no Otozure*),” is available in the facsimile reproduction. The other two Easter works are known only by documentation. These so-called cantatas were prepared for evangelical purposes, but were also used as performance pieces for visitors and general audiences. The impetus for Scudder to create them seems to have come from two directions. One was the use of printed publications as mission tool. His model was the monthly newspaper in Japanese, *Yokokobi no Otozure*, published by Mr. and Mrs. Miller. The other was the vogue of choral cantatas for new singing societies of all types in his native U.S.A., with democratic ideals, the growth of a middle-class, and Americanism providing a background for the movement. Some 3,000 American cantatas were published anew helped by printing technology and commercial distribution. Although expertise for printing Western music of a certain level of complexity was limited in Meiji Japan, Scudder’s pieces were successfully published, advertised, and one was performed nine years after he left for Hawaii in 1907.

The author wishes to acknowledge the distinguished work by Dr. Shun-Ichi Teshirogi who made “GLAD TIDINGS FOR CHRISTMAS” available in the reprint collection, and completed various studies on surrounding subjects. Also, special thanks are due to Meiji Gakuin for the lasting and respectful care of Mrs. Florence Schenck Scudder’s grave for 110 years.

はじめに Preface

当稿は 1897 年 10 月 10 日から 1907 年 8 月頃までの 10 年に満たない期間（正味は 8 年間）¹に亘り、長野で宣教したアメリカ改革派教会の宣教師、フランク・シーモア・スカダー（Frank Seymour Scudder）が編纂・出版した日本語歌詞を伴う楽曲についての考察である。曲は、手代木 俊一編集『明治期讃美歌・聖歌集成 第 39 巻 童蒙讃美歌』（1998 東京：大空社）に復刻されている。明治期のキリスト教歌集を集成・復刻、関連の多くのご研究を賜った手代木俊一博士に負うところ大きく、また、100 年以上に亘って Mrs. Florence Schenck Scudder の墓所をお守りくださった明治学院に心よりの感謝をささげる。

フランク・スカダーは、祖父 John Scudder [Sr.] が米国改革派教会 (Reformed Church in America、以下 RCA) が最初にインドへ派遣した宣教師のひとりであった家系で、父の Ezekiel Carman Scudder [Sr.] とその 6 人の兄弟、その子弟である少なくとも 5 名の従兄弟が全てインドやセイロンで宣教したなかで、ひとり日本を選んだ。父の任地インド Coonoor で 1862 年に生れ、1885 年ニュージャージー州の Rutgers College and the New Brunswick (N.J.) Theological Seminary を卒業 (AB)、ニューヨーク州やテキサス州で教師を務めた後、1890 年に牧師に任命されてイリノイ州で宣教し、国外宣教を志して RCA アラビア・ミッションで秘書・出納役を務めさらにニューヨーク州で教会を持った後に日本へ渡り長野に赴任した。1894 年に結婚した妻フローレンス (Florence) の病気のため 1906 年に東京へ移り、明治学院で教えながら信州の宣教地も監督する手はずであったが、フローレンスの没後 1 年余りで当時は米国領であったハワイで日本人を初めとする多様な人々への宣教を主たる任務とする職務に就くため、1907 年 7 月に急に招聘され 3 人の子供を連れてハワイへ転任した。同志社大学教授の祖父のほうのオーティス・ケリー [Sr.] (Otis Cary ケリーとも表記) によると、1907 年に Rev. Frank S. Scudder はそれ以前に日本でアメリカン・ボード宣教師であった従兄の Rev. Doremus Scudder, D.D. より同ボードの責任者 (superintendent) を引き継いだ (Cary 1909: 257)。後の人名事典には、1923 年まで superintendent of the Japanese Department であったと記載されている (VandenBerge 1978: 352)²。

1. イースター・アンセム Easter Anthem

アメリカ改革派教会外国伝道局 (Board of Foreign Missions, RCA) の年次報告書 (Annual Report) は発行前年の活動につき毎年 6 月頃発行された。従って各号の内容は基本的にその前年の活動

¹ 1902 年 10 月 10 日～1904 年 7 月 29 日までは職務継続扱いの休暇 (furlough) で離日したため。

² 伝記詳細は、文末《年譜》に記す。

についてのものである。本稿の文中では1897 年を扱う第 66 期年次報告書 (66th Annual Report, 1898) から 1907 年を扱う第 76 期年次報告書 (76th Annual Report, 1908) までを、「1897 年の報告書(66th 1898)」から「1907 年の報告書(76th 1908)のように表記し、サイト推奨の形式で脚注に記す。その 1900 年の報告書(69th 1901)に宣教師のフランク・スカダーは以下を報告している。

「[1900 年]年初に、私はマタイによる福音書の言葉を用いて復活のストーリーを伝えるイースター・アンセム(Easter anthem)を作成した。このアンセムの作成・編纂(preparation)のみならず、音楽に日本語をねじ込む(drill into)のには労力が多く、高度な忍耐力も必要とした。しかし、その結果は満足すべきものであり、ここの人々は幸いなる復活祭の真の意味を初めて理解できたと感謝した。このアンセムは長野と上田の教会で歌われたのである。曲は既に印刷所へ送られ、日本語でつくられた最初の復活祭聖歌となる³。」スカダーはまた、翌年の 1901 年の報告書 (70th 1902) でも「私が昨年作成したイースター・アンセムは今年出版され、多くの教会や学校で使われた。」と述べている⁴。

ここで作者のスカダーが使ったアンセム(anthem)の意味は必ずしも明瞭ではなく、教会で歌われたのが礼拝の一部としてであったかどうか不明である。タイトルも明示されていないが、出版に至った曲とは 1965 年には所在が確認されながら現在は所蔵先不明である「よみがへりのうた(Yomigaeri no Uta)」を指すのであろう⁵。この曲はまた、米国ハワイの公的アーカイブ収録の Nellist 編集のバイオグラフィー、*The Story of Hawaii and Its Builders* に「Frank Seymour Scudder, Minister and Educator (1862- 1956) が Religious Cantatas in Japanese Language を出版した、」との記載があるうちの 1 件、Yomigaeri no Uta, © 1901 に該当するものと考えられる⁶。スカダーはラトガース大学およびニュー・ブランズウィック神学校在学中にグリー・クラブ部長として *Songs of Rutgers* (©1885)の編纂を行っており、楽譜編集・出版の経験があった。85 ページに全 88 曲を擁するこの歌集は 1893 年には拡大改訂版も発行され、イエール大学所蔵の初版がインターネッ

³ "69th Annual Report of the Board of World Missions" (1901). *Annual Reports*. Book 44. http://digitalcommons.hope.edu/world_annual_report/44 p.47 [Hope College document PDF frame 80/153] *報告書各巻のページ番号は宣教地毎に分かれるためフレーム番号も記す。

⁴ "70th Annual Report of the Board of World Missions" (1902). *Annual Reports*. Book 45. http://digitalcommons.hope.edu/world_annual_report/45 p.43 [Hope College document PDF frame 72/147]

⁵ 「5614. よみがへりのうた Yomigaeri no Uta スカッター(Frank S. Scudder)著 東京 メソヂスト出版舎 明治 34 (1901) 2[月] 」として、国際基督教大学アジア文化研究委員会(編集)『日本キリスト教文献目録』(1965 国際基督教大学) p.149 に記載されている。

⁶ Edited by George F. Nellist (Honolulu Star Bulletin, Ltd. Territory of Hawaii, 1925)よりデジタル化、コピーライト記号、その他の文字化けのみ修正した。 <http://files.usgwarchives.net/hi/statewide/bios/scudder539bs.txt>

トで公開されている⁷。この中にはドイツ語、ラテン語、フランス語、ギリシャ語らしき言葉などの曲があり、ソロで始まってコーラスが入る等、複雑ではないものの演奏効果を上げるアレンジも使われている。学生のうち何人かが卒業後赴くことになる RCA 宣教地、アラビアや中国に関連する曲も含まれている。

2. クリスマス・カンタータ The Christmas Piece

イースターの曲は現在所在不明で見ることができないが、幸いなことにスカダー編纂のクリスマスの曲は、「クリスマスのよろこびのおとづれ」として『明治期讃美歌・聖歌集成 第39巻 童蒙讃美歌』（手代木 1998）に復刻されている。Nellistのバイオグラフィーでは、Kurisumasu no Yorokobi no Otozura[sic], © 1903 に該当する。復刻されたのは、一作の単独出版物として明治39年（1906年）11月15日に印刷11月17日に教文館より発行され、大正元年(1912年)10月30日に再版発行されたもので本体に「カンタータ」の表記はなく、タイトル「クリスマスのよろこびのおとづれ」（目立たない所に英語 GLAD TIDINGS FOR CHRISTMASも表記）のみである。

ここでひとつ問題がある。ハワイの資料による出版年は 1903 年で復刻版の 1906 年と食い違いがある。スカダーはハワイで 1956 年まで存命であり自作の出版年に誤りがあれば正した可能性が高い。文末の《年譜》に示すとおり、RCA 報告書をたどって得た情報によると一家は 1902 年 10 月 10 日から、1904 年 7 月 29 日までサバティカル（furlough）で任地を離れており、1903 年には全く不在であった。不在中の連絡先は 25 East 22nd St. New York となっているが、これは RCA 外国伝道局の事務局で郵便物はここから所在地へ転送された模様である。前述のとおりフランクを輩したスカダー家は数代に亘る RCA 宣教師の家系で、フランク本人、父、伯父叔父、従兄弟の多くはインド、セイロン等の宣教地で出生しており、1783 年にニュージャージー州 Freehold で出生したフランクの祖父 John Scudder [Sr.]に遡るまで米国内で生まれ育った者はいない。1902～1904 年には父の Ezekiel Carman Scudder [Sr.]はインドで宣教していた。一方で共に帰米したスカダー夫人フローレンスの母、Mrs. Jennie Dumont Schenck の住所は Cranford N.J. になっている。詳細は不明だが、この 1 年半以上の休暇は病気のためと記載され（due to illness）、うち一定期間は夫人のニュージャージーの実家が近隣で過ごしたと思われる。インドを訪れていた可能性もある。1907 年のハワイ・ミッションからの招聘への受諾の書状に 3 年前にホノル

⁷ Scudder, Frank Seymour(President of the Rutgers Glee Club of '85), compiled and edited. 1885. *Songs of Rutgers*. New Haven: Shepard & Kellog. <http://digital.library.yale.edu/cdm/ref/collection/rebooks/id/165024> Yale University Library 所蔵 (full digital access)

ルへ立ち寄ったと記されており、とすれば 1904 年に米本土から日本へ戻る途上であった可能性が高い。これらの経緯から 1903 年に日本以外で一度印刷・出版し、1906 年に日本版を出版という可能性も考えられるが、米国連邦議会図書館音楽部 (Library of Congress - Music Division) の司書、Cait Miller によると米国著作権局 (U.S. Copyright Office) には Frank Seymour Scudder 名での登録は当時無かったとのことである⁸。

日本語歌詞をつけないならば、ニューヨークの 25 East 22nd St. は楽譜出版が盛んに行われた所謂ティン・パン・アレーに近く、Cranford N.J. から往復するのも容易な距離にある。RCA 宣教局本部を訪問する機会に出版を進めることは充分可能であったと思われる。彼がニューヨーク郊外で青年時代を過ごした後にも輪転印刷機の実用化など出版技術の革新が進み、アマチュア音楽の隆盛から販路が急拡大したと歩調を合わせ、音楽産業の拡大は楽譜印刷業界が担っていた。蓄音機と録音された音楽に比重が移り、その動きを米国で 1920 年に開始したラジオ放送が加速したのはしばらく後になってからである⁹。楽譜出版はその早い時期から一定規模の需要のある商圈で発達した歴史があるが (大崎 1993:202 など、) スカダーの最初の国内宣教地イリノイ州ハヴァナもプロテスタント系移民が多く暮らし、カンタータを出版する出版社が既に存在したシカゴやシンシナティから遠からぬ距離にあった¹⁰。

復刻された教文館刊の「クリスマスのよろこびのおとづれ」は横長版23ページ (表・裏タイトル・奥付含まず、) 第一部 8曲、第二部 6曲 (+聖書朗読) から構成され、規模は小さいながらもおそらくオラトリオの2部構成を踏襲している。歌詞は全てが日本語であるが演奏に関する *solo*、*male quartet*、*slowly*、*Repeat Spiritedly* などの演奏指定や指示は全てイタリック体の英語で書かれているので、礼拝の中で会衆によって歌われるのではなく、聴衆を前に聖歌隊や独唱者・独奏者をもって演奏されることを前提とする楽曲のように思われる。曲の構成は以下のとおり。:

Part I. (第一部)

第一 なにのしらべぞ [詞の出典なし]、

第二 神の大なるたまもの ヨハネ傳 3:16

Solo Male voices in unison Female voices in unison All voices in unison

第三 マリアの賛美 ルカ傳 I : 46, 50

⁸ 2015 年 7 月 17 日付 e-メール

⁹ 日本でのラジオ放送開始は 1925 年

¹⁰ たとえば、シカゴの Hope Publishing、シンシナティの Filmore Brothers や The John Church などである。

Soprano Solo

第四 ザカリアの歌 ルカ傳 I : 68, 79 [曲 ウェルナーのばら]

May be sung by a male quartet

[7ページ] テキスト 日・英

第五 東洋のはかせ マタイ傳 2 : I [tune Barnard, 讃美歌 II 188 with variant]

Solo with violin accompaniment

第六 三人の博士の歌 マタイ傳 2 : 2 インドの譜 AN INDIA MELODY

Trio of male voices

第七 聖書朗讀 馬太傳 2; 3-9

第八 ベツレヘムの星 マタイ傳 2 ; 10, 11

Trio for Soprano, Alto and Tenor (or Second Alto)

Part II.

第二部

第一 主キリストの音 其一 ルカ傳2 ; 8 [Georg Friedrich Händel “He shall feed His flock like a shepherd” from *Messiah*]

Alternate Tune Eventide Sambika No. 9 として主バージョンと同じ歌詞を縦書きで示す。

[この讃美歌 9番は 讃美歌第1集 39番「日暮れて四方はくらく」]

第二 主キリストの音 其二 ルカ傳 2 ; 9-12

第三 栄光神にあれ ルカ傳 2 ; 13

Solo Trio of female voices

第四 天軍の歌 ルカ傳 2 ; 14

*Piano accompaniment may be made brilliant, by playing, at times, an octave higher.

第五 聖書朗讀 ルカ傳 2 ; 15-20

第六 第一部の第二 最唱 神の大なるたまもの

Chorus No. 2. of Part I

第七 第一部 第二の譜を持ちふ

Solo and Chorus No. 1 of Part I. verses 2 and 3 [繰り返す歌詞を縦書きで]

[21ページ] テキスト 日本語 「世の人々の待ち望みし救主」

[22ページ] テキスト 英語 “THE EXPECTATION OF THE MESSIAH IN THE WORLD”

[23ページ] テキスト 英語 “THE STAR OF BETHLEHEM” by Henry Van Dyke

第二

神の大なるたまもの

ヨハネ傳 3: 16.

First system of the musical score. It features a piano accompaniment in 4/4 time with a key signature of one flat. The melody is in the right hand, starting with a *pp* (pianissimo) dynamic and a *cres* (crescendo) marking. The lyrics are in Japanese: "そ の う み た ま へ る ひ そ り こ た た ま ふ け". There is a *Solo* marking above the melody and a *dim* (diminuendo) marking below the piano part.

Second system of the musical score. It continues the piano accompaniment and includes vocal entries. The piano part has a *pp* dynamic. The lyrics are: "に の ひ そ な あ い し た ま へ り ひ そ な あ い し". There is a *Male voices in unison* (男子) entry with a *m* (mezzo-forte) dynamic. The lyrics continue: "た へ り こ は す へ て か れ た し ん す る も". There is a *Female voices in unison* (女子) entry with a *mf* (mezzo-forte) dynamic. The lyrics continue: "の に ほ ろ ぶ る こ さ な く し て か ぎ り な き". There is a *ritard* (ritardando) marking above the piano part.

Third system of the musical score. It features a piano accompaniment and a vocal entry. The piano part has a *f* (forte) dynamic. The lyrics are: "い の ち た か ぎ り な き い の ち う け し め ん が". There is an *All voices in unison* (男女) entry with a *cres* (crescendo) marking. The lyrics continue: "た め な り". There is a *dim* (diminuendo) marking above the piano part and a *Ritard* (ritardando) marking below the piano part.

第一部と第二部のそれぞれは広い音域を用いる鍵盤楽器の序奏で始まり、前者は声部がポリフォニックに推移し、後者はヘンデルのオラトリオ「メサイア」から “He shall feed His flock like a shepherd” を（指定はないが、おそらくソリストが）歌う。「メサイア」の当該部分の英語歌詞は日本語歌詞に呼応している。教文館刊の奥付に「編纂者 エフ、エス、スカッダー」とあるとおり、楽曲の多くは他から引用し編曲したパスティーシュとみられるが、第一部 第六「三人の博士の歌—インドの譜 AN INDIA MELODY」以外に曲の出典は示されていない。第一部 第四、「ザカリアの歌」は「ウェルナーの野ばら」として知られる4部合唱であるが、やはり明記されていない¹¹。

その次の第一部 第五、「東洋のはかせ」Solo with violin accompaniment の歌のメロディは、現行の讃美歌第2集の188番、および讃美歌21の151番「きみのたまものと」と同様に始まる。しかし「東洋のはかせ」はAA' 間奏BA'の形式で讃美歌とは異なり、別のアレンジを基にした可能性もある。讃美歌第2集の188番、および讃美歌21の151番「きみのたまものと」はAA' B B'A A'の形式で現在広く用いられている英語讃美歌の多くと基本的に同様である¹²。

より明らかな讃美歌との関連は、第二部 第一 「主キリストの音 其一」である。譜面上に Alternate Tune Eventide Sambika No. 9 と表記して楽譜中と同じ歌詞を縦書きで示している¹³。讃美歌の9番は「日暮れて四方はくらく」、『讃美歌 第1編』（1903）の39番で Eventideの曲(Tune)名となっている。様々な状況で、いわゆる替え歌として曲に別の歌詞をつけることは多いが、同じ歌詞を代替旋律で歌う指示はめずらしい。当時の歌い手にヘンデルのアリアは難しいと考えた可能性はあるが、曲の韻律（ミーター）は10.10.10.10であり、同韻律の選択肢は現在の讃美歌サイトでも数多い¹⁴。

スカッダーがその中でEventideを選んだ理由は何だったろう。この旋律で広範に歌われる詞

¹¹ このアレンジは3度低いだけで *Songs of Rutgers* 収録曲の”Two Little Roses”とほぼ同じであり、最後から2小節目「すくひを」を入れるため八分音符を十六分音符に分けている 強弱も殆ど同じだがフェルマータの後は P の代り にdim.となっている。

¹² この曲と讃美歌との関連はフェリス音楽図書館スタッフに依る。*Cyber Hymnal*によれば、*The Endeavor Hymnal* (1902) に、ハワード・グロース(Howard Benjamin Grose, 1851-1939)による “Give of your best to the Master; Give of the strength of your youth.”の詞で讃美歌として採録された。讃美歌での Tune 名は Barnard であり、由来は著名なバラード作者 Charlotte Alington Pye Barnard (Mrs. Charles Barnard, 1830-1869, 筆名 Claribel) が 1864 年に世俗の歌詞 “Take Back the Heart That Thou Gavest”を伴って発表したことによる。日本では『新撰讃美歌』（1888）や『讃美歌 第1編』（1903）にはなく、時期的にこの曲が讃美歌としてスカッダーの元に達したかどうかは確定できない。

¹³ 細かいが楽譜中の歌詞では「このあたりにひつじをかふものありけるが、のにありて」の部分が縦書き歌詞では「のにをりて」になっている。

¹⁴ <http://www.cyberhymnal.org/mid/met/met.htm>

“Abide with me” はHenry Francis Lyteが1847年、死の3週間前に書いたと言われる。彼は生涯病弱で50代で亡くなったのだが最後までウィットを失わなかったといわれる。旋律 EventideはLyte 没後の1861年にWilliam Henry Monk によって付けられて讃美歌として広まり、LyteにとってもMonkにとっても最も知られる曲となった。当時は比較的新しく背景も知られていたかも知れない。原詩は7節より成り必ずしも死を明示はしてはいないが、クリスマスの曲の後半冒頭に想起するのに、あまりふさわしくないのではないかと思える¹⁵。

Abide with me; fast falls the eventide;

The darkness deepens; Lord with me abide.

When other helpers fail and comforts flee,

Help of the helpless, O abide with me.

この代替旋律はむしろ、「クリスマスのよろこびのおとづれ」の成り立ちのヒントかも知れない。フローレンスは1906年は4月15日であったイースター後の4月23日に亡くなったが、その年6月発行の前年の活動報告を彼女自身が具体的に書いている部分もあり(後述)、病を抱えていたとはいえ急逝であったと推察される。日曜学校はもちろんのこと、他の宣教活動においても彼女は夫と共に音楽面で小さからぬ役割を果たしたことはRCA 報告書に伺える。例えば1902年の報告書(71st 1903)では、夫妻の不在に備えミラー氏が「音楽を学んでオルガンが少し弾けるアシスタント(Miss Matsumura)を確保」しており¹⁶、スカダー夫人自身は1904年の報告書(73rd 1905)にEnglish and singing classを報告¹⁷、1905年の報告書(74th 1906)にもクッキングやテーブルマナーと並んでsuccessful music classに言及している¹⁸。彼女への追悼(eulogy)には、音楽を通して(by music)で周囲の日本人からも敬愛され(won admiring affection)、友人として尊敬される(looked up to as a friend)存在であった、とのひとかたならぬ賞賛がみられる¹⁹。

教文館刊の出版は1906年11月、夫人没後にゼロから始めて出版を準備できたのだろうか。前のイースター・アンセム「よみがへりのうた(Yomigaeri no Uta)」では「印刷所に送った」から「出版され演奏された」は2年に亘っている。出版年が1903年か1906年かの問題を解く鍵に

¹⁵ 日本語の『讃美歌21』では218番として明確に「死」に分類される。

¹⁶ "71st Annual Report of the Board of World Missions" (1903). *Annual Reports*. Book 46. http://digitalcommons.hope.edu/world_annual_report/46 43 ページ [PDF 76/147]

¹⁷ "73rd Annual Report of the Board of World Missions" (1905). *Annual Reports*. Book 48. http://digitalcommons.hope.edu/world_annual_report/48 52 ページ [PDF 87/171]

¹⁸ "74th Annual Report of the Board of World Missions" (1906). *Annual Reports*. Book 49. http://digitalcommons.hope.edu/world_annual_report/49 55 ページ [PDF 88/171]

¹⁹ "75th Annual Report of the Board of World Missions" (1907). *Annual Reports*. Book 50. http://digitalcommons.hope.edu/world_annual_report/50 [PDF 119/242 137/242 など]

はならないが、1906 年が正しいとすれば 4 月 23 日以前に夫妻協同で制作を始めてあったと考えられ、“Abide with me”は Florence が愛唱した讃美歌であったか、あるいは彼女を悼んで挿入されたと考えたくなる²⁰。「クリスマスのよろこびのおとづれ」の第二部が「主キリストの音其一」の後には、比較的シンプルな 3 曲と聖書朗読、第一部から繰り返す 2 曲で終わるのも重要な貢献者を失ったためなのであろうか。

いくつかの曲の出所が判明してみると、前作のイースター・アンセムの制作に関してスカダーが、「音楽に日本語をねじ込む (drill into) のには労力が多く、高度な忍耐力も必要とした。」と述べた意味が良く理解できる。つまり、伝統的声楽曲のように既定のテキストに曲を付けるのではなく、ポピュラー音楽の分野で行われることがあるように既存の音楽に日本語歌詞を嵌めていく、いわゆる曲先の方法をとっている。例外的に曲の出典が「インドの譜 AN INDIA MELODY」と示されている第一部 第六「三人の博士の歌」は、スカダーが自身で採譜して構成した曲なのかも知れない。

曲の出所を明らかにしない一方で歌詞にはヨハネ、ルカ、マタイの福音書の引用箇所が明示されているが、当時の日本語版聖書の直接引用ではなく割合に平易な、子供でも分かる歌いやすい歌詞になっている。これらを準備するのにあたって日本人の援けがあったとも考えられるものの、曲に歌詞を当て嵌めていくのに語彙の理解は不可欠であろう。スカダーは来日後3年目の1900年の夏には、長野県中野市の劇場で騒がしい群衆を前に日本語で講演して人々の注意を最後までそらすことなく、日本語の使用に初めて勝利を収めたと感じる、と報告するなど、比較的短期間に相当高い言語能力を得ていたと思われる²¹。

楽曲以外の部分、東洋の博士のお話、F. N. Peloubet の日曜学校レッスン、Henry van Dyke の引用なども興味深い。たとえば、第五曲「東洋のはかせ」の前にあたる7ページに、「ギリシャのガスバル、インドのメルキアル、エジプトのバルタバルに加えて、もう一人のペルシャのアルタバンがいたかも知れません」として General Lew Wallace の *Ben Hur* と van Dyke の *The Other Wise Man* を紹介している。前者は1888年11月に出版された米国でのベストセラーであり²²、後者は1895年の出版で、当時米国でも一般には新しかった内容を日本の人々に伝えようとしている。

²⁰ “Abide with me”は 旧英領圏で戦没者記念日などに演奏され、葬儀で用いられることもある。最近では、エルトン・ジョンがアレンジしており、ネットで視聴できる。

²¹ "69th Annual Report of the Board of World Missions" (1901). Annual Reports. Book 44.
http://digitalcommons.hope.edu/world_annual_report/44 48 ページ [Hope College document PDF frame 81/153]

²² よく知られるのは、1959年制作のハリウッド映画によってである。

また、巻末に近い21ページに日本語で、救世主の誕生を待ったのは西洋のみではなく四人の博士達の国々においてでも同じだ、としてヤコブ、ゾロアストル、釈迦、プラトールを引用している。続く22ページと23ページは英語で、それぞれF. N. Peloubetのタキツウスやウェルギリウス、孔子の予言を説く1896年12月20日付の日曜学校レッスンと、Henry van DykeのTHE STAR OF BETHLEHEMが引用してある。スカダーは家族や自身の体験を踏まえて広い地域や人々に視線をおいていた。のちにハワイに移って1923年に多民族の若者のための超宗派・超民族のChurch of the Crossroads の設立に尽力したが、その教会の建築は鳥居を思わせる赤い列柱の構造を持ち、祭壇は仏教、ヒンドゥ教、ユダヤ教、ゾロアストロ教の象徴を含む木彫で飾られている。

3. 成立の背景 Background of Creation

明治後期の日本で、他に類似の楽曲が無い状況でスカダーが「カンタータ」を編纂・出版した背景には何があったのだろうか？ それには2つの側面が考えられる。第一はミラー夫妻の文書伝道が与えた影響である。第二は、19世紀米国でのカンタータの隆盛、特にその出版である。

エドワード・ローゼイ・ミラーとメアリー・エディ・ミラー（旧姓キダー）の夫妻は、スカダーが日本に赴任した1897年10月10日には盛岡で伝道していた。もともと信州はRCAミッションが上田と小諸を中心に長く活動した宣教フィールドで日本人信者がおり、少なくとも2名の宣教師を必要とする最重要地域のひとつだが1897年まで20年宣教師が不在であった、と75期年次報告書は歴史的に記述している。そこで言及される「20年前」は、1876年8月にミラー氏による伝道が行われ、16名が洗礼を受け信徒37名で上田日本基督公会を設立した時を指すのであろう²³。

長野で宣教するにおいてスカダーはミラー夫妻を頼りにし、なによりも「クリスマスのよろこびのおとづれ」の日英のタイトルはミラー夫妻が三浦徹とともに編集・発行していた、キリスト教刊行誌『喜の音』〔よろこびのおとづれ Glad Tidings〕に倣うものである。1899年10月に信州への訪問を要請したり²⁴、自身が病気になった時や夫人の没後に信州のフィールドを託したりもした。東京から北方を宣教地とする繋がり以上のものが感じられる。1899年1月5日に長野で誕生した娘 Margaret のミドルネームは Miller であり、洗礼を司式したのはミラー氏であった。ミラー夫妻との繋がりや家族の間に語りつがれている。ミラー夫妻の宣教に対す

²³ 現在長野県上田市にある日本キリスト教会上田教会である（中島耕二、大西晴樹、辻直人 2003）。

²⁴ 『フェリス女学院 150 年史資料集 第3集』p.100に「ミスター・スカダーの求めに応じて、ミスター・ミラーは10月に南信州に伝道旅行...」についてのp.101の脚注10は誤り、このスカダーはフランク S. なのはほぼ間違いない。脚注に書かれた Dremus Scudder は後に Frank をハワイに招聘した従兄である。

る真摯な態度、日本語の定期刊行物を用いて丁寧に福音を説く手法などは、慣れない日本に赴いたスカダー夫妻に多大な影響を与えたのではないだろうか。そのキダー夫妻は三浦徹とともに盛岡で『喜の音』を発行していたが、1900年に三浦は静岡県へ移る。それにもかかわらず1号も欠けることなく日本語による刊行物を出版し、いわゆる文書伝道を行っていた。スカダーはそのような活動が可能で、しかも効果を上げるのを身近に体験し、日本語による出版に意欲を持ったであろう。

插图 2 《エドワード・ローゼイ&メアリー・エディ・ミラーの『喜の音〔よろこびのおとづれ〕』》



ミラー夫妻は既にあったひらがなタイトルの『よろこびのおとづれ』、第二号からは『「よろこばしきおとづれ』(1876年12月～1882年2月まで毎月刊行、A5判8ページ)を引き継いで、1882年(明治15年)3月から、三浦とともに新たに漢字交じりタイトルの『喜の音』を発行した²⁵。1888年(明治21年)3月に盛岡へ移っても継続し、次第にその宣教の大きな部分を占めるようになった。この時、東北伝道の拠点として盛岡へ行くことを薦められたミラー夫妻は、編集している『喜の音』の重要性をあげ、協力者三浦が不可欠である、と一緒に移った経緯がある(森田1995:53-55)。編集・刊行は1900年

に三浦が静岡県へ移っても続き、三浦の孫に当たる永井道雄などによると家族総出の助力があったて続けられた活動であるらしい(永井1985)。内容は新・旧約の聖書物語、詩(讃美歌)、翻訳や翻案の物語などで挿絵は銅版画であった(森田1995:57)。これらの状況から、スカダー作品の日本語テキスト部分なども、三浦と彼を巡る人々の有形無形の助力に依った可能性がある。また、『喜の音』の出版費用は、先行誌から引き続いて1856年にブルックリンで結成されたThe Foreign Sunday School Association(略称FSSA)が援助し、それは同団体が1918年にWorld's Sunday School Associationに吸収合併されるまで続いたという(石崎2010)。スカダーの出版物にもこの団体、あるいは他の類似団体の援助が得られていたかもしれない。

²⁵ 先行したひらがなタイトルの雑誌、『よろこびのおとづれ』/『よろこばしきおとづれ』は、東京神学大学図書館所蔵のマイクロ・フィッシュからの複製を横浜開港資料館が作成し所蔵しており、同館の館報『開港のひろば』に詳述されている。一部の号の表紙には楽譜が印刷されていたことも興味深い。

ミラー夫人は三浦の移動に困惑はしたものの、盛岡と静岡および東京（印刷所）という遠隔地との協力作業で、「2種の新聞の発行はそれまでどおりに続き、2種合計で月間14,800部であった。ここで大変に興味深いのは、これらの新聞は今ではカナダのヴィクトリア州、ハワイ、台湾でもこれらの土地の日系人のために配布されていることである。」と記録されている²⁶。

『喜の音』の発行部数については、引き継いだ1882年頃には主に予約で3,000部であったのが、1900年(明治15年)10月に東京でひらかれた宣教師の大会の会議録によると『喜の音』と1894年創刊の『小き音「ちいさきおとづれ Little Tidings」』とを合わせて1万4,800部まで増えた記録もあり（森田 1995）、年次報告書の「2種合計で月間14,800部」との記述と一致する。

ミラー夫妻と三浦の『喜の音』は1882年の1巻1号から月刊誌として刊行された。A5判当初12ページ、基本的には月刊だが月に2回出した時期もある。筆書きのタイトルで先行誌の特殊な活字のひらがなタイトルから普通の活字に替え、上下二段組み、文体は統一されておらず、文語体と言文一致体が混合している。表紙は筆書きのタイトルに竹に雀の絵で、読者からも「竹に雀」と親しまれ大正期になるまで変わらなかった。当初の定価は一銭、印刷人は三浦の父千尋の名。編集発行人は三浦自身が多いが、弟の不二尾や、義弟の松崎連の名になっていることもある（森田 1995: 57-57）。

スカダーはクリスマスの曲のタイトルを『喜の音』に倣ったのみならず、キリスト教内の宗派を限定せずに幅広く伝道できる手段である、彼等の印刷物による伝道活動、いわゆる文書伝道に影響されたと考えられる。上記のようにミラー夫妻の新聞は既にハワイでも配布されており、後に日本人・日系人関係の伝道を担うためにハワイへ転任した後も現地でそれらを活用してきたであろう。1907年にスカダーの着任をハワイで詳しく伝えたのは「ロッキー山脈以西で最も古く」1843年1月から現在まで続くキリスト教系新聞 *The Friend* であるが²⁷、スカダーはその編集主幹 (Managing editor)を 1908-36年のあいだ務めた²⁸。

4. ジャンル The Genre

スカダーが「カンタータ」の編集・出版を志した背景には、母国アメリカでの音楽出版、特

²⁶ 1900年の報告書。69th Annual Report of the Board of World Missions" (1901). *Annual Reports*. Book 44. http://digitalcommons.hope.edu/world_annual_report/44_45 ページ [Hope College document PDF frame 78/153]

²⁷ <http://server.honstudios.com/mhm-friend/cgi-bin/mhm-friend?a=p&p=home&e=-----en-20--1--txt-IN----->

²⁸ Scudder, Lewis R. III. 1998. *The Arabian Mission's Story: In Search of Abraham's Other Son* (Grand Rapids, MI: Wm. B. Eerdmans) p.378 fn #27 *The Friend* での任期については1920年までとの説もある。

にカンタータとよばれる楽曲の印刷の興隆があるのだろう。アメリカニズム、合唱団体、出版技術の進歩などから、聴衆を集めて演奏する目的の（バッハの場合のようにキリスト教礼拝の中で歌われる目的ではない）カンタータへの一般的需要の高まりが米国での流行の要因であった。カンタータは音楽史的にまとまりのあるひとつの独立したジャンルとはいえず、学校・会堂を示す語に端を発する「オラトリオ」との明確な区別は判然としないが、概してオラトリオのほうが大掛りで演奏時間も長い。オラトリオが演奏場所の「オラトリー」に端を発する名称であるのに対しカンタータは「歌うもの」であり、19世紀北米のプロテスタント宣教師達にとって、J.S.バッハに代表されるルーテル派教会カンタータとの連続性のあるジャンルとして意識されたかどうかも分からない。バッハの頃の教会音楽は作者の死後30年もすれば演奏機会は失われ、「斯く斯く云々の曲があった」との知識として受容されるのが常だった（寺本 1995: 310-312）ためである。

19世紀以降、カンタータは合唱と管弦楽のための多種多様な作品を表すものとなった。多楽章から構成されるが、オペラで発達したレチタティーヴォはあまり用いられず、器楽編成や合唱・独唱の交代、テンポの変化などによって楽章を構成した。多くの場合、独唱声部を含む合唱と管弦楽のための作品に対してカンタータという名称が用いられるようになる。特に、ベートーヴェンが1814年のウィーン会議の際に作曲した『栄光の瞬間 [Der glorreiche Augenblick]』のように、記念式典や特別な行事にむけて大規模なカンタータが好んで作曲された。このため、カンタータとオラトリオ、オードとの間には、曲種としての相違がほとんどなくなり、カンタータはオラトリオより一般に演奏時間が短い、といった傾向が認められるに過ぎなくなる。演奏時間が1時間以上ならオラトリオ、それより短ければカンタータとする記述もあるようだ。

カンタータは19世紀中にイギリスで音楽祭のために多作され、アメリカでは特に東海岸で作曲され始め、南北戦争後20世紀初頭までには当時盛んになったコーラル・グループ活動を通して全米に広まった。19世紀のアメリカでの演奏活動には、エマーソンが、“The American Scholar”で謳いあげたように²⁹、ヨーロッパとは異なるアメリカ独自文化によるアメリカン・ルネサンスの理想を反映して、欧州発の名作のみならずアメリカの作曲家の新作へのコミットメントが見られる。「アメリカの一般的洗練への主要要因として合唱音楽には大きな文化的権威が付された」（Orr 2013: 475）。1810年のスチーム・プレス、1843年の輪転機などの実用化に代表され

²⁹ 「よその国に追従してきた私たちの長い修行時代は終ろうとしています。私たちは自らの足で歩き、自らの手で働こうではありませんか。そして自らの心を語ろうではありませんか」 Ralph Waldo Emerson “The American Scholar” An Oration delivered by Ralph Waldo Emerson before the Phi Beta Kappa Society, at Cambridge, August 31, 1837 full quote <http://shc.stanford.edu/american-scholar>

る印刷・出版の急速な発達に伴って夥しい数のカンタータが出版され、そのテーマは宗教的、歴史的、時事的、幻想的なものまで広範に及んだ。19 世紀後半には George Frederick Root(1820-95) や Dudley Buck(1839-1909)などにより、大衆的アピールを失わずかつ音楽的サブスタンスの豊かな作品も多く作られた (Orr 2013: 490-492)。これらの一部はスカダーの在任時期以降に日本に輸入され、RCA のミッションで演奏された記録がある。

アメリカでつくられたカンタータには大部のカタログが作成されており (Dox 1986)、学者はもとより、コーラル・グループの指導者や指揮者、あるいは演奏団体の選曲委員会や音楽監督を主なターゲットとしている。収録されている作品は、1985 年までに米国内で発表され (明示あるいは合理的推定)、連邦議会図書館、ニューヨーク公共図書館を初め、多くの大学図書館など全米の主要図書館やアーカイブに所蔵されているものに、約 300 人の存命の作曲家から自作の情報を得て加えている。大多数が印刷・出版された曲で、少なくとも米国ではカンタータに対する一般的需要の高まりが多作される要因であったことが伺える。439 曲のオラトリオと並んで採録された、3,000 超のカンタータのうち Choral cantata が大半の 2,841 曲を占めており、Ensemble cantata (114 曲)と Choral Theatre (61 曲)は、それぞれ分けて記載されている。この簡単な種類分け以外は作者名順で、タイトル、テーマによる索引はあるが年代や出版社で検索することはできない。

カンタータとして採録するについて明確な条件は記されておらず、作曲家の自己申告以外は編者が楽譜を検証して決定した模様である。米国人 (帰化した作曲家を含む) によることが条件のようで、例外的には帰化を念頭に置いて比較的長く在米したドボルザークの曲が採録されている。採録されたうち、大まかに数えて約 270 曲に上る Choral cantata が 19 世紀末までにつくられている。初演に際して新聞・雑誌に載った批評が再録されている場合もあり、上記のドボルザーク作 “The American Flag,” Op. 102 (1893)は *New York Times* 紙に酷評されている (Dox 1986 vol II: 467)。この評者が予想したとおり演奏されることは稀だがインターネットで録音を聴くことは可能で、コロンブスのアメリカ発見 400 周年記念にコミッションされた愛国的カンタータとして興味深い³⁰。このように、アメリカでは新しいカンタータが盛んに演奏され受容されていた。フランク・スカダーは、日本へ赴任するまでの米国で、特に彼が学生時代を送りラトガースのグリー・クラブ団長までつとめたニューヨーク近郊において、これらアメリカン・カンタータの隆盛を目の当たりにしたことだろう。また前述のようにニューヨークを離れ

30

<https://classicalconditioning.wordpress.com/2015/06/13/suggested-listening-the-american-flag-op-102-by-antonin-dvorak/>

て中西部で教会を持った時も遠からぬ都市にはカンタータの出版社があり、通信と交通の発達によってニューヨークやボストンから楽曲をタイムリーに入手することもできた。英国の Novello 社からボストンの Oliver Ditson 社が導入した八折り(octavo)フォーマットの楽譜は 1876 年の輪転機でオフセット・リソグラフィー印刷する方法で、それ以前の四折り(quarto)フォーマットの楽譜に比較して価格が約 800%低下していた (Orr 2013: 484)。

当時のアメリカのカンタータの内容はきわめて多岐に亘り禁酒カンタータまであったが、南北戦争や米西戦争の影響で特に好まれたのが愛国的テーマであった。そのなかで聖書に基づく宗教的なカンタータはむしろ少数派であった、とというものの一定数の曲がつくられ、RCA ミッションにおける宣教の一助として声楽・器楽の複合的楽曲を演奏することは有効であり、クリスマスというパジェントに相応しいカンタータがスカダーのモデルとされたのであろう。

19 世紀中にはアマチュア中心の合唱団体 (コーラル・ソサエティ) と並び、専門音楽家を主体として商業的に演奏を行う合唱団体も多く設立され、中産階級の台頭によって数百名の合唱団に管弦楽が付く大掛かりな演奏に対する需要もあった。1815 年設立のボストンの Handel and Haydn Society をモデルに欧州の作曲家名を冠した団体が多く生れ (Orr 2013:486)、ユタ州ソルト・レイク・シティの Mormon Tabernacle Choir (1847 年)のように特定の宗派を母体とする場合もある。演奏履歴ではヘンデル(*Messiah, Samson*)、ハイドン(*Creations*)、メンデルスゾーン(*Elijah*)等の大曲が主流を占め、同時期のアメリカの作曲家によるものは少数である。これら大編成のオラトリオ・ソサエティのうちニューヨークの New York Oratorio Society (1873 年)は 19 世紀末まで 400 名~600 名の歌手を擁し、その演奏履歴には上記のスタンダード曲の他にバッハの「マタイ受難曲」(部分)、ベルリオーズ、エルガー等も含まれている (Orr 2013:486)。

5. 印刷 Music Printing

1900 年の報告書 (69th 1901) において、スカダーは印刷所への便利(conveniently located with reference to the printer)という言い方をしている。「年の最初の 3 ヶ月向けに Scholar's Leaflet 中に日曜学校ヘルプ(副教材?)を作成し、その後は中級ヘルプの仕事へ異動した。しかし印刷所への便宜がよい場所に居るパートナーが全ての仕事をこなした。」イースター・アンセム作成と同じ個所で印刷に回す別の仕事に関して記述しているのである³¹。

³¹ "69th Annual Report of the Board of World Missions" (1901). *Annual Reports*. Book 44. http://digitalcommons.hope.edu/world_annual_report/44 p.47 [Hope College archive PDF frame 80/153] Personal Work.の部分中 Leaflet with reference to the printer という言及。

印刷といっても ミラー夫妻の出版物にはなくて、スカダーに必要なのは本格的な楽譜の印刷である。筆者と同世代でピアノを習った友人達や現在の音楽専攻生が、「クリスマスのおとづれ」の楽譜について一様にコメントするのは、「見慣れたものと似ていてとても100年前とは思えない。」ということ、一方で日本語の文字は「古くておもしろい、しかも右書き、左書き、縦などバラバラ、」ということだ。楽譜部分のみ海外で印刷し、日本でテキストと組み合わせて出版したのだろうか？ いまだ解決されない出版年の問題もある。

ハワイの資料はスカダー本人が在世中に出版されたので無視できないが、文章の出版物なら1903年に英語版発行、のち1906年に日本で日本語版としても不自然ではない。しかし五線の間に歌詞が配置された楽譜ではどうだろう。楽譜の印刷は各音符の長さや、複数の旋律や声部の縦の関係も視覚的に表現しなくてはならず複雑な工程が不可欠だ。日本では一説によれば、学校教育に西洋音楽を取り入れようとした福沢諭吉が、西洋のような楽譜を作らせようと考え、最初に楽譜の仕事を依頼した先が印舗だったと言われている。20世紀末に実用に耐えるコンピュータソフトができるまで日本で作曲家の手稿から浄書される楽譜や、総譜から作成されるパート譜は、つげ材の音符や記号の判子を押す「スタンピング」で作成された。1980年代までは楽譜判子を作成できる職人が神保町にいたそうで、つげ判子を用いる日本独自の楽譜作成技術やそれを用いた作品は海外でも高く評価された。

西洋音楽が他の伝統を凌駕した背景のひとつが記譜法の発達と、それによって可能だった効率的な音楽伝播であったことは論を待たない。西洋での楽譜印刷は15世紀から試みられ、19世紀までには様々な方法があった。1797年に化学反応を利用し石板にインクの乗る箇所と乗らない箇所を作る平板印刷、いわゆるオフセットの基をアロイス・セネフェルダーが発明、この化学印刷と従前の活字やパンチを使う方法を組み合わせ、用いる材質・材料を改良し、また原板から直接印刷する代りに型をとり複製したり輪転機にかける方法で高速・大量な楽譜印刷が可能になった。この平板印刷法は一般化したが、複数の原板作成の方法・材料が一長一短で、勅許や特許が絡む楽譜印刷では新技術が一斉に採用されることもなく、同時進行的に発展していたようである。一方で、凹版で金属板にエッチングを行い、記号や音符はパンチで打印する彫刻打印法の印刷楽譜は仕上がりが非常に美しく、20世紀末まで原典版全集等の原板としてマイスターが作成していた。

印刷学会の月刊『印刷雑誌』は、明治24年（1891）から発行されていた初代『印刷雑誌』の二代目として大正7年（1918）に創刊され、現在でも日本唯一の印刷科学・技術情報誌として継続している。楽譜印刷に関する情報は少ないが、なかで、東京築地活版製作所の宮崎榮太郎

による「楽譜印刷に就いて」(『印刷雑誌』大正 8-9 年 (1919-1920)号)を印刷博物館と印刷図書館で閲覧することができた。記事は驚くべく正確でかつ詳細であり、連載の 5 回目(第 3 巻 4 号、1920 年 4 月)には可動細分活字(movable type)のケース上の配置図が 2 種類掲載されている³²。宮崎は分解的活字と呼び、その種類は 300 ないし 400 あり植字法は難しく価格は高いと言う(宮崎 1919/No. 1:31、1919/No. 2:12)。さらに主に宮崎を引用した、山本隆太郎「楽譜印刷物語」昭和 25 年 (1950)号が『印刷雑誌』とその時代 ―実況・印刷の近現代史―(2007:468-476)に復刻され、その中でも可動細分活字(movable type)のケース図と一小節のみ組み方の例がある。一小節でもパーツ数は数十に上る。「米国ではしばしば出版される模様である。とくに讃美歌集などには多く用いられている」(山本 1950 in 2007:471) というが、1950 年時点で「現在日本では楽譜活字を用いているところは不明」とあり、印刷雑誌社社長でもその実例を出すのは難しかったらしい。山本はきわめて実践的な宮崎の「実地作業」の記述を追っているが、「やはり楽典を一通り心得ていなくては満足な仕事はできないであろう。」と結論づけている。

ライプツィヒのブライトコプフ社の 2 代目が 1755 年に考案した可動細分活字は楽譜印刷の概略史では石板法にとって代わられた印象だが、ブライトコプフの 1,000 を超える活字種類を宮崎の述べる 300~400 まで簡略化した方式のものが米国キリスト教会で用いられ、来日した宣教師によって日本でも楽譜に使われていた。手元の「クリスマスのよろこびのおとづれ」は復刻で細部の特徴を結論づけるには足らないが、山本が言及する「眼につく五線のつなぎ目」もあるように思われ、この種類の活字が使用された可能性が高い。きわめて手間がかかり熟練を要する手法だが、一度作成すれば広く永く使われ、各曲の見た目の統一性が重視される讃美歌集のような用途には適した特徴があったと思われる。

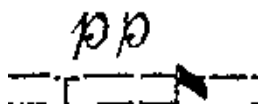
讃美歌学(hymnology)は確立された分野で明治・大正の日本に関する先行研究も多いが、具体的な楽譜印刷が調査されることは少なく、キリスト教宣教に関連する印刷業は一般印刷業界とは距離を置いていたようだ。そこで横浜市小机出身の村岡平吉の存在が鍵となる。横浜で欧文植字を身に着けた後に上海に渡り、米国長老派教会の上海美華書館で技術を磨いて帰国、[王子製紙会社]横浜製紙分社でキリスト教出版業務の責任者として、明治 21 年 (1888) 4 月出版の『新撰讃美歌』を印刷した。楽譜付の明治 23 年 12 月版に Printed by Seishi Bunsha とある。『譜付：聖公会讃美歌』明治 25 年 (1892) には、奥付に「印刷者 神奈川県平民 村岡平吉」とある。彼は 2014 年放映の NHK『花子とアン』の花子の義父であり、明治 31 年 (1898) に独立してキ

³² 英国のミラー・アンド・リチャード会社 (Miller & Richards) および、ペイテント・タイプ・ファウンドリー P.M.シャंक会社 (Patent Type Foundry or P.M. Shanks & Co.)のもの。

リスト教出版の印刷製本会社「福音印刷合資会社」を横浜市山下町 81 番地に創業した。同社は英語、日本語はもちろんハングル、インド、台湾、シンガポールに対応する多国活字を保有し、聖書を印刷製本して輸出し「バイブルの村岡」としても著名だが、徳富蘆花の作品を含む多くの書籍も手掛け、フェリス女学院も学校出版物を依頼していた。明確な記録はないものの、他の設備と共に海外から楽譜印刷用一式も持ち帰り手間の掛る楽譜印刷を一手に引き受けた可能性もある。福音印刷は大正 12 年(1923) の関東大震災で横浜本社社員約 70 名と責任者（平吉の五男斎、ドラマでは花子の妹かよと婚約していた郁弥）が亡くなった。東京本社（銀座）も震災で倒壊したが平吉の親族が教文館の一部に間借りし、しばらくは命脈を保っていたものの、廃業届け出が大正 14 年 3 月に報告されている。村岡平吉については、出身地や徳富蘆花との繋がりから研究なさる峯岸英雄氏に負うところが大きい。「クリスマスのよろこびのおとづれ」の楽譜部分も教文館との関連もあった福音印刷に関わったなどすれば、1903 年に日本で印刷することは可能であったろう。

この曲の楽譜印刷は見たところが現代の譜面と異なる点は少ないが、特徴的なものとして弱音を示す記号がある。重ねて「ピアノッシモ」を示す頻度が高く全編に亘っているが、単独で「ピアノ」の場合でも同じ形である。可動細分活字 (movable type) で、p 記号のみ別に作られたのではないかと推定できる。ベートーヴェンの初期印刷楽譜について彫版道具が年代推定の手がかりともなる（長谷川 2002）例があるので、細かい点ではあるが記しておく。

挿図 3 《弱音(ピアノ) 記号》



前述したとおり、ここで調査した「クリスマスのよろこびのおとづれ」は明治 39 年 (1906 年) 11 月 15 日に印刷 11 月 17 日に教文館より発行され、大正元年(1912 年)10 月 30 日に再版発行されたもので、その奥付は当然再版を反映している。「発行者：堀田達治、発行所：教文館、印刷所：教文館印刷所」は全て 1906 年に落ち着いた現在の教文館書店の場所(当時は銀座四丁目一番地、現在は四丁目五番地)の住所になっている。少々不思議なのは「印刷者：イー、テー、アイグルハート (住所は銀座四丁目一番地で同じ)」である。アイグルハート氏(Edwin Taylor Iglehart)は「メソジスト監督教会の宣教師として 1904 年に来日し人生の大半を青山学院に奉職

された方」³³だが、スカダーの曲を再版するに当り何らかの影響を及ぼした可能性がある。

7. もうひとつの曲 Another Easter piece

亡くなる年（1906）に刊行された1905年の報告書（74th 1906）にスカダー夫人が、1905年の3月下旬から4月初めにかけて教団を代表して日本を訪れた使節団（Deputation）のために、「成果を上げている音楽クラス」（a successful music class）が「歓迎の歌と特別に準備したイースター音楽」（a welcome song and with the special Easter music they prepared）と言及しているのはどんな音楽であったのだろうか³⁴？ 調査した「クリスマスのよろこびのおとづれ」再版が刊行された1912年の『福音新報』910号(12月5日)から911号、912号には、教文館の「クリスマス大賣出し開始」の広告が掲載されている。この年は明治から大正に改元され、9月13日に明治天皇の大葬があったため、クリスマス向けの広告の掲載は遅くなっている。この広告中に、スカッダー作 曲譜「よろこびのおとづれ」と並んでスカッダー作 曲譜「カルバリ山の小夜嵐」がある。定価は2曲とも20銭、郵税4銭で同程度のサイズの出版物と想定される。

バイオグラフィー(Nellist 1925)によるとスカダーは3曲の日本語による宗教カンタータをつくった。3番目の[G]essemene no Sayo-Arashi, © 1906 「ゲッセマネのさよあらし」がイースターの曲で「カルバリ山の小夜嵐」に類似したタイトルを持つが、受難テーマであってもゲッセマネとカルバリ山は明らかに異なる場面であり、改作かもしれない。1905年春に長野で音楽のクラスが自分達で準備した、というのはいずれかの「さよあらし」の曲かと思われるが、楽曲全体ではなく一部の選曲かもしれないし、以前の「よみがへりのうた」を用いた可能性もある。新作時だけではなく時節的に『福音新報』に広告が出されたことが判明したので、今後は該当年のクリスマスとイースター前の同誌を調査してみたい。

いずれにしても、「さよあらし」は外国人が日本語のテキストを手がけたとしては、凝った印象的な用語である。現代に思い浮かぶのは地名の小夜の中山くらいだが、明治時代には「小夜嵐の翌朝」「小夜嵐が…過ぎる」など口語文に使われていた。辞書の定義は「夜吹く強い風、夜の嵐」だが「邪魔になるもの、たたかったり抗う対象」のニュアンスがある。私達が耳にする可能性があった用例は昭和11年（1936年）に完成しNHK 国民歌謡としてラジオで広く放送された「朝」（小田進吾作曲）によってであり、陸・海軍礼式歌としても挙げられているので

³³ 青山学院資料センター「所蔵資料クローズアップ」<https://www.aoyamagakuin.jp/history/mcenter/closeup.html>

³⁴ "74th Annual Report of the Board of World Missions" (1906). *Annual Reports*. Book 49.
http://digitalcommons.hope.edu/world_annual_report/49 p.55 PDF 88/171

我々の親の世代はよく知っていたと思う。歌詞は曲よりずっと早く、信州にゆかりの作家、島崎藤村によるものである。『落梅集』明治34年（1901年8月、春陽堂）の朝・昼・夕の労働雑詠の一である。同じ歌集には「小諸なる 古城のほとり」や「椰子の実」も収められている。

朝はふたたびここにあり 朝はわれらと共にあり 埋(うも)れよ眠(ねむ)り行(ゆ)けよ夢
隠(かく)れよさらば小夜嵐(さよあらし)

藤村は明治学院卒業後、東京音楽学校選科在学、仙台在住などを経て1899年から6年間は小諸義塾の英語教師を務め、1906年に上京した（手代木 2014）。スカダーの長野在住とほぼ重なって近隣にあり、もちろん直接の関係は想定できないものの、困難の多い信州という任地でスカダーは藤村の詩歌と行き合うこともあったのか、と想像したくなる。

8. 「クリスマス」演奏記録とアメリカン・カンタータ Performance History

讃美歌ではなく聴衆を前に演奏される複合的な宗教曲を編纂し、印刷・出版したスカダーには、教団派遣の一宣教師としてよりも広い対象に福音を伝えたい、との目論見があったと考えられる。明治39年に初版が発行され6年後の大正元年（1912年）に再版されていること、初版時『福音新報』に6回に亘って広告が打たれ、再版時にも3回広告されていること³⁵、などからかなりの部数は流通したのではないかと推察される。定価は初版・再版とも20銭で日本銀行と旧大蔵省が出す物価指数で計算すると200～300円であり、内容から考えると安いような気がする。前述のように、海外のキリスト教関係の団体から援助があったのではないかと推察される。

バイオグラフィー (Nellist 1925) には「クリスマスのよろこびのおとづれ」は他2曲と共に「カンタータ」と記されているが、編纂者フランク・スカダー自身は1901年出版の「よみがへりのうた」をEaster Anthemとしていることは既に述べた(1900年の報告書、48)。ただし、彼の任期以後、RCAミッションにおいて、クリスマスに一般聴衆を招いて演奏することが慣例となった楽曲の数々は、英語の報告書で“cantata”と記されるのが常であった。1916年のクリスマスに下関(Sturges Seminary、1914年から梅光女学院)で「クリスマスのよろこびのおとづれ」が演奏された記録があり、大正元年の再版を用いたかもしれないが、10年前に出版された曲を、スカダー牧師によって「何年前に(some years ago)」アレンジされた、と表現している事実は興味深い。その頃までには、日本へ伝わる時間差は多少あるとしてもアメリカからより新しい曲を手に入れて演奏するのが普通であったようだ。「今年のクリスマスの催し物(entertainment)にはた

³⁵ 初版時は第594号～第599号 教文館新刊広告中に「スカダー先生著 クリスマスのよろこびのおとづれ 右はクリスマス用に適切なる歌十五種類を蒐めたるものなり。」再版時は作者名とタイトルのみ。

いへんに出席者が多く、私共の狭いところにお客を収容するのに苦労した。学校の合唱隊はF.S. スカダー牧師によって何年か前にアレンジされたカンタータ (the cantata) “Good Tidings” を上演した。昨年先の例にならい、大戦争によって苦難を強いられている人達へ献金が集められた。合計で35円になり多額とは言えないが、与えた者にも与えられた者にもお恵みであると思わせるを得ない³⁶。」

この年を含めて1930年代まで、場所も日本、中国、インド等の伝道拠点で主にクリスマスには学校生徒によって「カンタータ (cantata)」が演奏された、と記録され、RCA英文報告書に作曲家や曲名を含めて記載されていることもある。それらは器楽伴奏を伴う聖歌隊による合唱を中心に、重唱、ソロや器楽オブリガート付など変化に富む複数の曲 (movements) から成り、しばしば二部に分かれており、中には会衆が唱和することができる曲 (讃美歌) も含まれ、クリスマス等の行事に一般聴衆を招いて学校生徒が演奏することができたと推定できる。RCA報告書によって特定できるカンタータはアメリカから輸入され、フェリスを初めとするミッション・スクールで学外の多くの聴衆を集め、他所での演奏に招かれたりして評判になっていった。記録が英語のみなので全てについて断定はできないが、日本語歌詞を用いたスカダーの時と異なり、その頃には生徒が英語で歌う (cantata in English) ことが聴衆を感嘆させた様子が伺える。これらアメリカン・カンタータの演奏記録については稿をあらためたい。

おわりに

1923年9月1日の関東大震災、1945年8月15日の第二次世界大戦終結に至る戦災によって東京や横浜では多くの史料・資料が失われ、明治期という比較的近い過去の楽曲についても現在目にすることができるのは、作成された楽曲のうちのどれ位に相当するかも判断が難しい。それでも、多くの資料がインターネットで公開されて周辺情報を収集しやすくなっている現在、調査を続けることによって所在不明の楽曲等をたどる手がかりをさらに見いだせることを願っている。

³⁶ “The Christmas entertainment this year was so well attended that there was difficulty in accommodating the guests in our narrow quarters. The school chorus presented the cantata “Good Tidings” arranged by Rev. F. S. Scudder some years ago. Following the precedent set last year, an offering was taken for those suffering on account of the great war. The sum collected amounted to Yen 35.00, and tho[sic.] this is not a large sum, we feel that it cannot help but be a blessing both to those who gave and to those for whom it was given.” RCA 85th Annual Report of the Board of World Missions (1917) South Japan, p. 114 (PDF 183/257)
http://digitalcommons.hope.edu/cgi/viewcontent.cgi?article=1064&context=world_annual_report

《年譜》 Frank Seymour Scudder

出生 1862 年 4 月 28 日 インド Coonoor

父 : Ezekiel Carman Scudder [Sr.] (1828-1896)

母 : Sarah (Tracy) Scudder

1885 年 教師 Tarrytown, New York

1886 年 教師 San Antonio, Texas

1890 年 New Brunswick Theological Seminary

1890 年 牧師ライセンス(Lic Cl) New Brunswick

1890 年 牧師任命(Ordained Cl) Illinois

1890-92 年 牧師 Havana, IL 国内宣教師 (home missionary) Havana, Illinois

1893-94 年 RCA アラビアン・ミッション秘書・会計役(secretary and treasurer) [Nellist 1925 では 1892 - 1893 年]

1894 結婚 妻 : Florence Dumont Schenck of New Brunswick, N.J. 1875 年 2 月 9 日出生 [生年は 1874 年の伝記もあるが、東京青山霊園の墓石では 1875 年]

1894-97 年 牧師 Mt. Vernon, NY Reformed Church in America,

1897-1906 年 信州教区担当宣教師(field missionary in charge of the Shinshu field)として日本で宣教

1897 年 10 月 10 日 Mr. and Mrs. F. S. Scudder は、Mrs. Scudder の母 Mrs. Jennie Dumont Schenck と共に日本に到着。Mrs. Schenck (daughter of a former minister)は準宣教師として、1901 年 4 月まで長野に滞在、帰米した住所は Cranford N.J.

1898 年 秋 初めて山越えて南信州へ(往復それぞれ徒歩 4 日)

1899 年 1 月 5 日 娘 Margaret Miller 出生 長野 (洗礼式はミラー夫妻が司式)

1900 年 10 月 13 日 息子 Raymond Dumont 出生 長野 (洗礼式は聖公会牧師が司式)

1901 年 4 月 知事の招聘で長野の警察学校で毎週教える。この仕事は 2 年ほど続いた。

1901 年 イースター・アンセム「よみがへりのうた」出版 (この年のイースター 4 月 7 日)

1902 年 10 月 10 日 Rev. and Mrs. Frank S. Scudder と子供達、夫人の病気[乳がん]のため furlough (職務継続扱いの帰国) へ。帰米中の住所は 25 East 22nd St. New York

1903 年 4 月 30 日 Rev. and Mrs. Frank R.[sic.] Scudder と家族、欧州経由で米国着[WBFM 29th]

1903 年? 「クリスマスのよろこびのおとづれ」出版 [Nellist 1925 による]

1904 年 7 月 29 日 Rev. and Mrs. Frank S. Scudder と家族、日本に帰任

1905 年 12 月 3 日 娘 Ruth Dorothy 出生 長野

1906 年 東京明治学院 白金キャンパスに於いて、後に A. K. ライシャワー一家が住み「ライシャワー館」と呼ばれる宣教師館 [明治学院中学校・東村山高等学校 校地に復元]に住まう [近接の別の宣教師館の可能性もあり。] 1906 年に教えた記述はあり(辻 : 2012)

1906 年 「ゲッセマネのさよあらし」出版 [Nellist 1925 による](この年のイースター 4 月 15 日)

1906 年 4 月 23 日 妻 Florence 死亡 東京

1906 年 11 月 15 日 教文館版「クリスマスのよろこびのおとづれ」印刷、11 月 17 日発行

1907 年 3 月 東京明治学院、高等学部および普通学部教員(英語・聖書)担当 [明治学院高等学部・普通学部規則(明治 40 年 3 月)による]

1907 年 6 月後半 RCA Hawaiian Board の臨時会議、Frank Scudder の招聘を決議 翌日発信

1907 年 7 月 6 日 招聘状受信、7 月 12 日 受諾

1907 年 9 月 ハワイ着任

引用文献

- 青山学院資料センター 2010. 「青山の宝 15 世紀発行のラテン語辞書」『「所蔵資料クローズアップ」』 <https://www.aoyamagakuin.jp/history/mcenter/closeup.html>.
- 石崎康子 2010 「資料よもやま話 東京神学大学図書館所蔵 『よろこばしきおとづれ』 の複製本公開」『開港のひろば』 第 109 号。
- 大崎滋生 1993 『楽譜の文化誌』 音楽之友社。
- 国際基督教大学アジア文化研究委員会（編集）1965 『日本キリスト教文献目録』 国際基督教大学。
- 鈴木美海子 2015 「RCA 伝道局報告書に見るフェリス」 『フェリス女学院 150 年史資料集 第 3 集』 フェリス女学院。
- 手代木俊一編 1996-1998 『明治期讃美歌・聖歌集成』 42 巻 大空社。
- 手代木俊一 2014 『明治と讃美歌：明治期プロテスタント讃美歌・聖歌の諸相』 明治学院大学博士論文（芸術学）。
- 寺本まり子 1995 「ドイツにおける受容」『教会カンタータの成立と展開—バロック音楽の諸相』 アカデミア 309-320。
- 永井道雄 1985 「祖父、三浦徹のこと」『明治学院史資料集 第 12 集』 明治学院大学図書館。
- 中島耕二、大西晴樹、辻直人 2003 『長老・改革教会来日宣教師事典』 新教出版社。
- 長谷川由美子 2002 「ベートーヴェン初期印刷楽譜におけるプレートの混在—彫版道具についての一考察—」 国立音楽大学『音楽研究所年報』 第16集、163-182。
- 宮崎榮太郎 1919-1920 (東京築地活版製造所) 「楽譜印刷に就いて」『印刷雑誌』 大正 8-9 年号。印刷雑誌社 印刷博物館所蔵。
- 森田絵里 1995 「三浦徹とその仕事」『日本のキリスト教児童文学』 国土社。
- 山本隆太郎 1950 「楽譜印刷物語」『印刷雑誌』とその時代 —実況・印刷の近現代史— (初代および 2 代目『印刷雑誌』記事アンソロジー) 2007、468-476。
- The Board of Foreign Missions, the Reformed Church in America. 1857-1968. *Annual Reports*. Hope College digital commons. http://digitalcommons.hope.edu/world_annual_report/
- Cary, Otis. D.D. 1909. *A History of Christianity in Japan*. New York: Fleming H. Revell.
- Dox, Thurston J., compiled 1986. *American Oratorios and Cantatas: a Catalog of Works Written in the United States from Colonial Times to 1985*. Metuchen, NJ: Scarecrow Press.
- Emerson, Ralph Waldo. 1837. "The American Scholar" An Oration delivered by Ralph Waldo Emerson before the Phi Beta Kappa Society, at Cambridge, August 31, 1837 full quote <http://shc.stanford.edu/american-scholar>.
- Nellist, George F. ed. 1925. *The Story of Hawaii and Its Builders*. Honolulu Star Bulletin, Ltd.: Territory of Hawaii. Published in "Statewide County HI Archives Biographies." <http://files.usgarchives.net/hi/statewide/bios/scudder539bs.txt>.

Orr, N. Lee. 2013. "The United States." Chap. 31 in *Nineteenth-Century Choral Music*, ed. by Donna M. Di Grazia, 475-499. New York: Routledge. (Routledge studies in musical genres.)

Scudder, Frank Seymour, compiled and edited. 1885. *Songs of Rutgers*. New Haven: Shepard & Kellogg. <http://digital.library.yale.edu/cdm/ref/collection/rebooks/id/165024> in Yale University Library (full digital access.) (President of the Rutgers Glee Club of '85.)

Scudder, Lewis R. III. 1998. *The Arabian Mission's Story: In Search of Abraham's Other Son*. Grand Rapids, MI: Wm. B. Eerdmans.

VandenBerge, Peter N. 1978. *Historical Directory of the Reformed Church in America, 1628-1978*. Grand Rapids, MI: Wm B. Eerdmans.

The Woman's Board of Foreign Missions, the Reformed Church in America [WBFM]. *Annual Reports*. http://digitalcommons.hope.edu/foreign_annual_report/

参考文献

秋山繁雄 1984 「ミラー夫妻と三浦徹の盛岡伝道」『あゆみ』第14号、2-13。

石倉小三郎 1940 「楽譜印刷に関する一考」『印刷時報』5月号、2-12、大阪出版社。

植村正久、奥野昌綱、松山高吉 1890 『新撰讃美歌』（楽譜付）警醒社。国立国会図書館所蔵。

ウェーバー、ウィリアム 2015 『音楽と中産階級＜新装版＞』城戸朋子訳、法政大学出版局。

大和田俊之 2011 『アメリカ音楽史—ミンストレル・ショー、ブルースからヒップホップまで』講談社。

音楽工房 JOHN&きらら 「楽譜浄書」 <http://www.fuchu.or.jp/~john/kirara/joshotop.htm>.

神野忠彦 1994 「楽譜小僧の浄書小咄」『日本フィナーレユーザーズクラブ会報（第3号〜）』（楽譜ソフト「Finale」を通じて美しい楽譜とは何かを研究するユーザーグループ）1994年2月〜再録 <http://members3.jcom.home.ne.jp/kanno.office/kobanashi/kobanashi.html>.

皓星社編集部 2001 『日本人物情報大系』宗教編（96巻〜100巻）。

佐波正一、佐波薫、中村妙子 2001 『三本の苗木—キリスト者の家に生まれて』みすず書房。

辻直人 2012 「米国改革派教会の日本伝道 宣教師の派遣実態」『あゆみ』第65号、1-20。

手代木俊一 1999 『讃美歌 聖歌と日本の近代』音楽之友社。

手代木俊一 2008 『日本プロテスタント讃美歌・聖歌史事典 明治篇』港の人。

戸ノ下達也、横山琢哉 編著 2011 『日本の合唱史』青弓社。

水谷彰良 2003 『消えたオペラ譜—楽譜出版にみるオペラ400年史』音楽之友社。

峯岸英雄 2015 『福音印刷』創始者 村岡平吉の軌跡『郷土神奈川』神奈川県立図書館。

峯岸英雄 2015 「日本近代キリスト教精神側面史—村岡花子と義父・村岡平吉の軌跡」『大倉山論集』第61号 179-202 大倉山精神文化研究所。

宮崎榮太郎 1919-1920 (東京築地活版製造所)「楽譜印刷に就いて」『印刷雑誌』大正 8-9 年号。
印刷雑誌社 印刷博物館および印刷図書館所蔵。

山本隆太郎 1950「楽譜印刷物語」再録『『印刷雑誌』とその時代 ―実況・印刷の近現代史―』
(初代および 2 代目『印刷雑誌』記事アンソロジー) 2007、468-476。

渡部満 (教文館代表取締役社長) 2015「教文館ものがたり」
http://www.kyobunkwan.co.jp/about_us/history。

渡辺裕 2012『聴衆の誕生—ポスト・モダン時代の音楽文化』中央公論社 中公文庫 (春秋社
1989 の新装版 2004 の文庫化)。

Di Grazia, Donna M. ed. 2012. *Nineteenth-Century Choral Music*. London:Routledge.

The Friends. 1843-. Hawaiian Mission Houses & Archives Digital Collection.
[http://server.honstudios.com/mhm-friend/cgi-bin/mhm-friend?a=p&p=home&e=-----en-20--1--t
xt-IN---](http://server.honstudios.com/mhm-friend/cgi-bin/mhm-friend?a=p&p=home&e=-----en-20--1--t xt-IN---).

Gamble, William. 1923. *Music Engraving and Printing*. Reprint New York:Da Capo,1971.

Heideman, Eugene P. 2001. *From Mission to Church: The Reformed Church in America Mission to India*.
Grand Rapids, IL: Wm. B. Eerdmans.

Kimura, Yukiko 1988. *Issei: Japanese Immigrants in Hawaii*. University of Hawaii Press .

Stowe, David M. 1998. “Scudder, John [Sr.],” in *Biographical Dictionary of Christian Missions* ed.
Gerald H. Anderson (New York: Macmillan), 610.